

クラスの集まりで子どもが「お話ししたいこと」を支える保育者の援助

～4歳児が家庭での体験を話す場面を中心に～

中島 寿子

A Study of a Kindergarten Teacher's Support for Children in Class Meetings:
with a Focus on 4-Year-Old's Narratives about Their Experiences at Home

NAKASHIMA Hisako

(Received September 24, 2021)

1. 問題と目的

幼稚園教育要領（2017告示）改訂の際に「見通しや振り返りの工夫」が加わったことをふまえ、筆者は帰りの集まりで1日の園生活を振り返って話す4歳児への保育者の援助について分析した（中島，2019，2020）。幼稚園児がクラスの集まりで自分の体験を振り返って話す場面を観察した先行研究において、4歳児は他児の話聞くことができるようになるが、自分の話をしたい時には待ちきれずに話し出す姿も見られること（奈良女子大学附属幼稚園，2007）や他児の振り返りを意識した姿も見られるようになること（太田，2018）が報告されており、このような4歳児の姿は、仲間の声が「内なる他者」として内化され、「多声的な自己内対話」が次第に可能になってくることの表れ（岩田，1998）であることをふまえると、自分の体験を話し、他児の話聞く場面での保育者の援助は、4歳児の自己が育つ上でも重要であると考えたためである。

この研究では、参与観察と保育者へのインタビューをもとに1日の園生活の中で「今日楽しかったこと」を振り返って話す場面を取り上げ、以下のことを明らかにした。保育者は、日頃から園生活の中で子ども一人一人の遊びを把握しており、遊びが充実していたと捉えた日の帰りの集まりで「今日楽しかったこと」を話題にしていた。また、その日の遊びについて話したり、関連する絵本を読んだりしながら子どもの中に「今日楽しかったことを話したい」という思いが生まれる状況も作っていた。1学期当初の子どもたちは自分が楽しかった遊びを保育者に向けて話すことが中心であったが、保育者はその話をよく聞き、他児が興味をもって聞くことができるよう

に、その子どもの言葉を繰り返す、話の内容を身振りでも表して伝える、思いや考えについて理解したことを言葉にする、質問してさらに話を聞く等の援助をしていた。2学期になり、子どもたちが友達と楽しんだ遊びを話したり友達の話聞いて自分の話をするようになると、保育者はその話を聞きながら他児にも問いかけたりして、「今日楽しかったこと」を一緒に振り返ることができるようにしていた。このような保育者の援助により、子どもたちは友達の話にさらに興味をもって聞くようになり、3学期になると、友達の話聞きながら、自分の体験を振り返って話す姿も見られるようになった。

この帰りの集まりでは、子どもが家庭での体験を話す場面も観察された。そこで、本研究では、クラスの集まりの中でも帰りの集まりで、家庭での体験を話す4歳児に保育者はどのような援助をするのか、そこにはどのような保育者としての願いがあるのか、「今日楽しかったこと」を話す時とはどのような共通点や相違点があるのかを明らかにする。

帰りの集まりで「今日楽しかったこと」を話す場合は、保育者はその日の一人一人の子どもの遊びを把握していれば、話の内容も理解しやすく、前述のような援助もしやすい。他児も、その子どもの遊びを見たり一緒に遊んだりしたことが、話の内容を理解する手がかりにもなる。しかし、家庭での体験は一人一人異なり、保育者も他児もその体験を共有していない。本研究では、そのような家庭での体験を帰りの集まりで話すこと、その話を聞いてもらうこと、友達の話聞くことは、4歳児にとってどのような経験になるのかについても考察する。

2. 研究の方法

(1) 研究の対象

Y幼稚園201X年度4歳児クラスの子ども22名(男児14名・女児8名、進級児12名・新入園児10名)と担任保育者。担任保育者は25年余の保育経験を有している。以下、Aと表記する。

Y幼稚園の園生活は子どもたちが自分の好きな遊びに取り組むことを中心としており、降園前にはクラスの子どもたちと保育者での帰りの集まりの時間を設けている(15~20分程度)。

(2) 観察とインタビューの方法

対象クラスで参与観察を36日行ない(1学期13日、2学期12日、3学期11日)、文字記録の他、デジタルカメラを用いて写真や映像での記録もした。そのうち17日については、帰りの集まりの場면을映像で記録した(1学期1日、2学期10日、3学期6日)。

観察日の保育後にAに時間がある時は、帰りの集まりの場面を中心にその日の園生活について語ってもらった。保育後に話を聞けなかった日のことや、さらに質問したいことについては、2学期後の冬休み、3学期後の春休みに時間をとってもらい、語ってもらった。

(3) 分析方法

観察した17日の帰りの集まりの中で、Aが問いかけて子どもが話をしたり、子どもが話し始めてAが話す場を設けたことが11日(1学期1日、2学期6日、3学期4日)あった。その話題を表1にまとめた。

本研究では、その中で子どもが家庭での体験を話した4日(2学期・3学期各2日)を取り上げ、映像記録をもとに作成した文字記録とインタビューの逐語録をもとに事例をまとめた。これらの事例をもとに、帰りの集まりで家庭での体験を話す4歳児にAがどのような援助をしているのか、そこにはどのような保育者としての願いがあるのかを分析した。その際には、他の観察日の記録も参考にした。

(4) 倫理的配慮

研究の目的と倫理的配慮について、子どもの保護者に文書と口頭で説明し、保護者全員から研究協力について書面での承諾を得ることができた。

事例の子どもの名前はすべて仮名である。

3. 事例と考察

各事例は、始めにその日の園生活と帰りの集まりで子どもが話をするまでの概要をまとめ、子どもが話をする場面は紙幅の都合からその一部を抜粋して、子どもとAのやりとりを表にまとめてまとめた。

事例の中で観察された主なAの援助を表2にまとめた。表2のaからjは、「楽しかったこと」を話す事例でも

表1 帰りの集まりで子どもが話した話題

月 日	話 題
5月20日	今日楽しかったこと
9月9日	O先生(実習生)と遊んで楽しかったこと
10月14日	(見学に来た)小さいお友達としたこと
10月28日	今日した「水族館」遊びのこと
11月4日	今日楽しかったこと
12月5日	サンタさんをお願いしたプレゼントの話【事例1】
12月9日	自分が体験した不思議なことの話【事例2】
1月13日	家族に聞いてきた干支の話【事例3】
1月20日	お正月に凧揚げをした話【事例4】
2月10日	5歳児に教えてもらってうさぎ当番をしたこと
2月24日	5歳児に招待された「ワールドスペシャル」で楽しかったこと/5歳児のすごいと思ったこと

注)「今日楽しかったこと」を話す場面の事例は、5月20日、11月4日、2月24日を取り上げた。今回は、12月5日、12月9日、1月13日、1月20日の事例を取り上げた。

表2 話をする子どもへのAの援助

a	話し始めるタイミングを伝える
b	他児に待つように伝える
c	話す子どもの言葉を繰り返す
d	話の内容を身振りでも表す
e	子どもが話さなかったことも加える
f	子どもに「～ね」「～よね」と応える
g	他児に聞くように促す
h	他児に同じか尋ねる
i	質問する
j	「自分も」と話す他児に応える
k	「自分が体験した」ということも話す
l	子どもに「～かね」と応える

観察されたが、k・lは観察されなかった援助であった。事例の中で、これらの援助については下線をひき、アルファベット記号をつけた。表の右欄にもアルファベット記号を記載し、表の下の注に各援助の説明を記載した。

【事例1】サンタさんをお願いしたプレゼントの話

(12月5日)

【事例1】は12月の事例であり、登園時に子どもから聞いた話をAが取り上げたことがきっかけとなっていた。

<この日の園生活>

製作をしたり、虫や葉っぱを集めたり、大縄跳びをしたり、Aと忍者ごっこをしたりと、子どもたちはそれぞれ自分の好きな遊びをして過ごす。

<帰りの集まり>

Aは絵本『わんぱくだんのにんじゃごっこ』(作:ゆ

きのゆみこ・上野与志作、絵：末崎茂樹）を読み、この日した忍者ごっこでどのような「術」を使ったか等、実際にやって見せたりしながら話をする。

Aは玄関にクリスマスツリーを飾ったこと、幼稚園でクリスマス会をすることも伝え、「クリスマスの歌を歌いましょう」と言って『あわてんぼうのサンタクロース』の歌の世界を描いた絵を見せる。そして、「サンタさんね」「リンリンリンってトナカイに乗って、クリスマスの前に来ます」と言って歌い始める。初めてこの歌と一緒に歌うため、Aは絵を見せて歌詞の説明も加えながら歌って聞かせる。歌に合わせてAが紙芝居のように見せる絵を見ながら、子どもたちも一緒に歌う。

最後まで歌うと、Aはプレゼントの袋を持ったサンタクロースの絵を見せたまま、話し始める。その後、子どもたちがサンタさんをお願いしたプレゼントについて一人ずつ話し始めた場面までを表3にまとめた。

Aはショウとケイから前日にサンタさんをお願いするプレゼントを決めてきたと聞いたこと、リエがサンタさんに手紙を書いたことを話し、「自分の体験」として、「先生」はサンタさんに「ちゃんとお話し」しなかったから別のおもちゃになってしまったという話もした（下線部k）。そして、「おれ、ポケモンの人形」と言ったリョウに「どの人形がほしいの？」と問いかけると、他児も口々に話し始めた。すると、Aは「サンタさんのお話をしようかな」と言って（下線部）、自分の所まで来て話したシンの名前を最初に呼んで話を聞き始めた。

Aは最初からこの話をしようと考えていた訳ではなかったが、歌っている子どもたちの顔を見ている時に思い出し、取り上げてみようと思ったと語っていた。また、子どもたちを見て、多くの子どもが話したいという思いをもっているとわかったので、一人一人に聞いてみようと思ったとも語っていた（表3【Aの話】参照）。

表3 【事例1】12月5日 サンタさんをお願いしたプレゼントの話（1）

子ども	A	援助
<ul style="list-style-type: none"> ・ショウ・ケイ：頷く。 ・リエ：頷く。 ・他にも話した子どもがいる。 ・ママ「ママちゃんもお手紙書いた」 ・「**も」 ・アヤ「アヤちゃん、何にもやってない」 ・リョウ「おれ、ポケモンの人形」と言う。 ・他児も口々に話し始める。 ・ママ・リエ・シン：前に出て、Aに話をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「昨日トイザラスに行って、このおもちゃがほしいですって」「サンタさんが分らんから」「ショウちゃん、ケイちゃん言ったんかねえ」 ・「リエちゃん、手紙書いたって言ったねえ」 ・「サンタさんにねえ」 ・「先生ね、前ね」「ポケモンハウスがほしいですってお願いしたんよ。そしたら、サンタさんがね」「ポケモンハウスデラックスをくれたんよ。でも、ポケモンハウスがほしかったんよk」「ちゃんとお話しとかんと、サンタさん間違えた一つでなるかもしれんから」と話す。 ・「あ、そうなの」と応え、「ポケモン、どの人形がほしいの?i」と尋ねる。 ・ママ・リエの体に手をそえ戻るように促し、「聞いてみよう」と言う。 	<ul style="list-style-type: none"> k i
<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シン：座っていた場所に戻りながら「スケボー」と言う。 ・シン：またAの所へ行き、横に立つ。 ・シン「スケボーが、ほしい」と言う。 ・手を挙げたままで聞いている子どももいる。 ・シン「いや、まだ」と言う。 ・「ハイ！」と、ほとんどの子どもが手を挙げる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「じゃあ、<u>シン君からa</u>」と言う。 ・「おいでシン君」と呼ぶ。 ・「じゃあ、今日は」「<u>お願いした話でもいいし、サンタさんにももらったものでもいいし、もらいたいものでもいい。サンタさんのお話しようかな</u>」と話し、「<u>どうぞ、シン君a</u>」と促す。 ・「あ、スケボーがほしい。<u>もうお願いした?i</u>」と尋ねる。 ・「まだ、そうなん。それは、お母さんにもよくわかるように言っとかんとわからんよ」とシンに話す。 	<ul style="list-style-type: none"> a a i
<p>【Aの話】 登園時、ショウとケイがトイザラスでおもちゃを選んできた話をしていた。始めからそのことを帰りの集まりで取り上げようと思っていた訳ではなかったが、『あわてんぼうのサンタクロース』を歌っている間に思い出し、聞いてみた。子どもたちが結構手を挙げていたので、みんなに話を聞いてみようと思った。</p>		

注1) 子どもの名前前に記載した数字は話をした順、「****」は聞き取れなかった部分。話した子どもを確認できなかった場合は、名前を記載していない。以下同じ。

注2) Aの援助：a) 始めのタイミングを伝える i) 質問する k) 「自分が体験した」ということも話す

子どもたちの中には、友達をお願いしたプレゼントの話を聞き、「自分も」と話す姿もあった(表4下線部)。その場面を中心にまとめたのが表4である。Aはコウが「だめだね(話す時間がない)」とつぶやくのを聞き、「今日はみんな言える」「時間があるから大丈夫だと思

うよ」(表4⑨)と伝え、一人一人の話を聞いていった。そして、「今日楽しかったこと」を話す時のように、話し始めるタイミングを伝え(a)、他児も理解しやすいように子どもの言葉を繰り返す(c)、身ぶりでも表す(d)、質問して話の内容を確認したり、さらに話せる

表4 【事例1】12月5日 サンタさんをお願いしたプレゼントの話(2)

子ども	A	援助
<p>③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シュン「あのねえ」と小声で言う。 ・シュン：前に出てAの横に立ち、「あのねえ、エグゼイドのベルト」とAに小声で言う。 ・タク：黙って手をあげる。 ・タク：頷く。 ・ルイ「あ、おれの弟もエグゼイドのベルトよ」 ・シュン：頷く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「<u>シュンちゃん</u>_a」と呼ぶ。 ・「ここおいで」と手招きする。 ・「あ、<u>エグゼイドのベルト</u>って。」と言い、他児に「<u>一緒の人</u>_h」と尋ねる。 ・「<u>エグゼイドのベルト、一緒?</u>_h」タクに尋ねる。 ・「エグゼイドのベルトの人。一緒だって」 ・「あ、そうなんだ。<u>エグゼイドのベルトがほしいんだね</u>_f」と応える。 	<p>a</p> <p>c h</p> <p>h</p> <p>f</p>
<p>⑨</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ユウ：前に出て来る。 ・コウ「だめだね(話す時間がない)」と隣の子どもにつぶやく。 ・コウ「みんなあてる?」 ・ユウ「あのさあ、ウルトラマンオーブのさあ、オーブリング」 ・ユウ：頷く。 ・シュン「<u>シュンちゃん</u>もね、本当はね、オーブリングやったのに、お父さんがね、ベルトって決めたんよ」と言う。 ・シュン：頷く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「<u>ユウ君</u>_a」と呼ぶ。 ・「今日はみんな言える。いっぱい言えるよ」とコウに話す。 ・「うん。みんなあててあげる。時間があるから大丈夫だと思うよ」と応え、「<u>はい</u>_a」とユウに促す。 ・「<u>オーブだ。やっぱりユウ君はウルトラマンが一番好きなんだね</u>_{ef}」と応える。 ・「<u>そうなん</u>」と応え、「<u>オーブリングがよかった?</u>_{ji}」と尋ねる。 ・「<u>そうなん。お父さんと相談したんかね</u>_l。サンタさん」と応える。 	<p>a</p> <p>a</p> <p>c ef</p> <p>ji</p> <p>l</p>
<p>⑪</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ケン「<u>アクアビーズ</u>がほしい」座ったまま話す。 ・コウ「<u>コウちゃん</u>も、<u>アクアビーズ</u>ほしい」 ・マミ「あ、私、<u>アクアビーズ</u>持ってる」・「<u>私</u>も」 ・サエ「<u>サエちゃん</u>も」手を挙げて言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「<u>ケン君</u>_a」と呼ぶ。 ・「あ、<u>アクアビーズ</u>。」と応える。 ・「<u>アクアビーズってプリキュアのよね</u>_{ef}」と言う。 ・「<u>サエちゃんもアクアビーズ</u>_{cj}」と応える。 	<p>a</p> <p>c</p> <p>ef</p> <p>cj</p>
<p>⑭</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マミ「<u>一輪車</u>がほしい」前に出てきて話す。 ・マミ「<u>すごい高いやつ</u>がほしい」 ・マミ「なんか、<u>ピンク</u>の」 ・チカ「<u>私</u>も高いのー!」と言う。 ・マミ「<u>ピンク</u>の、ここから(床を触って)、ここまで<u>高いやつ</u>(高く手をあげて)」と言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「<u>マミちゃん</u>_a」と呼ぶ。 ・「あ、<u>一輪車</u>もらうの。」と応える。 ・「<u>高いやつ</u>っていうのは、<u>乗るのが高いってこと?大きいってこと?</u>_i」と尋ねる。 ・「あ、<u>かわいい</u>の。」_e」と言う。 ・「<u>乗れるかねえ。こんな高いのがあるんだって。</u>」「<u>乗れるかねえ(一輪車に乗るふりをして)</u>_d」<u>そうなの</u>」と応える。 	<p>a</p> <p>c</p> <p>i</p> <p>e</p> <p>c d l</p>
<p>【Aの話】子どもたちは友達の話をよく聞いており、保護者懇談の中で「〇〇ちゃんのお母さんがサンタさんに電話をしてくれた」「電話番号を知っているらしい」等、家庭で話していると聞いた。サエの母親からはサエの欲しい物が「アクアビーズと一輪車」に変わったと聞き、ケンとマミから話を聞いたこと(⑪⑭)を伝えた。サンタクロースはすごい関心事なんだと思った。</p>		

注) Aの援助: a) 始めのタイミングを伝える c) 子どもの言葉を繰り返す d) 身ぶりでも表す e) 子どもが話さなかったことも加える f) 「～ね」「～よね」と応える h) 同じか尋ねる i) 質問する j) 「自分も」と話す子どもに応える l) 「～かね」と応える

ようにする (i) 等の援助をしていた。他児の様子を見ながら「同じ」か問いかけたり (h)、「自分も」と言う声に答えたりして (j)、「自分も一緒」という喜びを味わえるようにもしていた。また、子どもの思いや考えについて理解したことを加えて話したり (e)、「～よね」「～ね」と応える (f) こともあったが、その日の一人一人の遊びをもとに理解しやすい「今日楽しかったこと」の時ほど多くはなかった。

自分をお願いしたプレゼントを話したシュン (表 4 ③) が、他児の話を受けて思わず「本当は」違ったのにお父さんが決めた (表 4 ⑨) と言った時には、A は「お父さんと相談したんかね。サンタさん」と応えていた (1)。「かね」という終助詞は「回答を期待しない、聞き手に配慮がある疑いという意味機能」を表し、「聞き手との心理的距離がより近いと感じられる」 (譚, 2014)。このような応え方は、子どもの思いに共感し、サンタクロスやお願いするプレゼントについて自分なりに考えたり想像したりしてほしいという願いの表れではないかと考える。

A は後日、子どもたちから聞いた話を保護者と伝え合っていた (表 4 【A の話】参照)。このことは、子どもたちの「関心事」について保護者と一緒に考える機会にもなっていた。

【事例 2】自分が体験した不思議なことの話

(12月9日)

この事例も12月の事例であり、A が登園時に子どもから聞いた話を取り上げたことがきっかけとなった。

<この日の園生活>

製作をしたり、氷鬼や大縄跳び、戦いごっこをしたり、一輪車に乗ったりと、すきな遊びをして過ごす。A は保育室内に折紙でサンタクロスを作るコーナーも設け、ほとんどの子どもがサンタクロス作りにも取り組む。

<帰りの集まり>

A はこの日取り組んだサンタクロス作りの話をして、「こんなにたくさんできました」と出来上がった作品を見せる。そして、「おもちゃのちゃちゃちゃを歌います」と言って『おもちゃのちゃちゃちゃ』の歌の世界が描かれた絵を見せ、歌い始める。子どもたちも A が紙芝居のように見せる絵を見ながら一緒に歌う。

その後、A はアヤが不思議な体験したという話を始める。アヤの話を読み、「自分も」同じような体験をしたと言うナナ (表 5 ①下線部) やママが話をした場面までをまとめたのが表 5 である。A はここでも子どもの話を聞いて、「おもちゃのおまつりかね」「おもちゃが」「でてきたんかねえ」(表 5 ①③ 1) と『おもちゃのちゃちゃ』の世界とも関連させながら、【事例 1】のように「～かね」(1) という応え方をしていた。

表 5 【事例 2】12月9日 自分が体験した不思議なことの話 (1)

子ども	A	援助
① ・アヤ「違うよ」と言う。 ・アヤ「あのね」「なんか、ずっと前ね、あのね、なんか」と続ける。 ・アヤ「前ね、もう片づけたのが、なんか、動いてた」と話す。 ・ナナ「ナナもよ。ナナも起きたらね」と話し始める。 ・アヤ「夜起きたら。夜じゃなくて朝起きたら」と言う。 ・アヤ「朝起きたら、おもちゃがなんか、外に出て」と話す。 ・他の子どもたちはじっと聞いている。	・「 <u>アヤちゃんねえ、昨日言ってたねえ。朝起きたらね、おもちゃが片づけたのに</u> _a 」とアヤの方を見て話し始める。 ・「片づけたはずなのに動いてたって。一昨日のことね」とアヤに言う。 ・「 <u>ずっと前だったの?</u> 」とアヤに尋ねる。 ・「うん、 <u>片づけたおもちゃが動いてたんだって</u> 。」と他児に話す。 ・「 <u>待って、今アヤちゃんが言ってた</u> _{b j} 」とナナに伝え、「 <u>アヤちゃん、なんだって?朝起きたら?</u> 」と尋ねる。 ・「 <u>出とたつんだって</u> 。」 _c 。おもちゃのおまつりかねえ _l 」と他児に話す。	a i c b j i c l
② ・ナナ「ナナね、今日寝ると時に、顔、ナナ、おもちゃがきとったんよ。パーンって。起きたら」と言う。 ・ママ「私、私くまちゃんが…」と言う。 ・ナナ「起きたらね、おもちゃが顔にあったんよ」と話す。	・「 <u>ナナちゃん、どうぞ</u> _a 」と促す。	a
③ ・ママ「私くまちゃんが片づけたはずなのにねえ、おもちゃ箱から出とった」と話す。 ・数名が「ハイ！」と手を挙げる。	・「はい、 <u>ママちゃんどうぞ</u> _{a j} 」と促す。 ・「 <u>おもちゃが、やったー、ママちゃんが寝たって出てきたんかねえ</u> 」 _l と他児に話す。	a j l

注) A の援助： a) 始めのタイミングを伝える b) 待つように伝える c) 子どもの言葉を繰り返す i) 質問する j) 「自分も」と話す子どもに答える l) 「～かね」と応える

3人の話を聞くと、数名が「ハイ！」と手を挙げ、その後も多くの子どもが話をした。その一部を表6にまとめた。ユウが「サンタクロースみたいなの」をお兄ちゃんが見たと話すと、Aはここでも【事例1】のように「自分の体験」として「先生の子ども」が「本物」のサンタクロースを見たと言ったという話をした(表6⑤下線部k)。すると、その話を聞いた子どもたちは口々に話し始めた(表6⑤下線部)。同じ子どもが「本物を見た」「夢で見た」と話す姿(表6⑤)や、夢で見たこと

なのか話を聞いて思いついたことなのか判断がつかねる話をする姿(表6⑥)もあったが、その話をじっと聞いている子どもが多かった。

Aは他児の話を聞いて「自分も」と話をしようとする子どもに待つように伝え、話を聞くように促して(表6④b g)、一人一人の話を全員で聞くようにしていた。そして、話をじっと聞いている子どもたちに、笑顔で「よく聞いとったねえ」「聞くの上手やったねえ」(表6⑥)と話していた。

表6 【事例2】12月9日 自分が体験した不思議なことの話(2)

子ども	A	援助
<p>④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シン「あのね、ぼくね、えっとね、おもちゃ片づけてたらねえ」と言う。 ・ルイも話し始める。 ・シン「朝ね、全然動いてなかった」と言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「<u>シン君_a</u>」と呼ぶ。 ・「うん」と応える。 ・<u>人差し指をあてて、ルイに「シーツ」と言う_g</u>。 ・「あら。シン君は片づけたから動いてないですって_c。」と言い、ルイを見て「<u>待っててね_b</u>」と確認する。 	<p>a</p> <p>g</p> <p>c</p> <p>b</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・さらに多くの子どもが「ハイ！」と手を挙げる。 <p>⑤</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ユウ「あのねえ、お兄ちゃんがねえ」「前ね、あのねえ、空にねえ、なんかねえ」「サンタクロースみたいなのがねえ」「いてねえ、おったって」と宙を指さしながら話をする。 ・他児も口々に話す。 ・タク「<u>おれもみたよ</u>」 ・マミ「<u>私もねえ、夢で見た</u>」 ・タク「<u>おれも夢でみた</u>」 ・ユウ「<u>おれも</u>」と言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「<u>ユウ君_a</u>」と呼ぶ。 ・「<u>見たって？_i先生の子どももねえ、窓あけたらねえ(窓から空を指さす動作をして)、サンタクロースがね、通ったって。見たって言ってた_{d k}</u>」と真顔で言う。 ・「<u>本物よ。本物見た人いたんよ_{j k}</u>」と応える。 	<p>a</p> <p>i</p> <p>d k</p> <p>j k</p>
<p>⑥</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多くの子どもが「ハイ！」と手を挙げる。 ・チカ：前に出て、Aの横に立つ。 ・マミ「私ねえ、すごいねえ、こわかった」「あのねえ、月のねえ、かげに」と話し始める。 ・チカ「あのねえ、地球をねえ、ずーっと、ずーっと回ってねえ**」と腕を回しながら話す。 ・「ハイ！」とすぐ手を挙げる子どもがいる。 ・チカ：頷く。「あともう一個」と言う。 ・チカ「あのねえ**おもちゃ**サンタさんからもらったんだけどねえ、なのにねえ、おもちゃ箱からねえ、出て来てねえ」「遠い国に行った」と言う。 ・子どもたちは黙ってじっと聞いている。 ・子どもたちはAの話も黙って聞いている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「<u>チカちゃん_a</u>」と呼ぶ。 ・「<u>待って待って_b</u>」とマミに声をかけ、隣に立つチカを指さして「チカちゃん(の番)」と言う。 ・「<u>地球を回ったのを夢に見たの？_i</u>」とチカに尋ねる。 ・「うん」と応える。 ・「ああ、そうなん」と応え、子どもたちを指さして、チカに「今上手にみんなよく聞いとったねえ」と笑顔で話す。 ・子どもたちにも「<u>おもちゃが出たって_c</u>。聞くの上手やったねえ。(耳に手をあてて聞くふりをしながら)チカちゃんが何言うかなと思って、みんな聞いてたよ」と話す。 	<p>a</p> <p>b</p> <p>i</p> <p>c</p>
<p>【Aの話】 子どもたちは『おもちゃのちゃちゃちゃ』の「おもちゃが箱をとび出して」のところがとてもすきで、「おもちゃが寝た時にこうなるんだって」という話をしていた。すると、前日の登園時、アヤが「昨日ね、起きたらね、おもちゃが動いとったんよ」と言っていた。それで、この話をしようと考えていた。</p>		

注) Aの援助: a) 始めのタイミングを伝える b) 待つように伝える c) 子どもの言葉を繰り返す d) 身振りでも表す g) 聞くように促す i) 質問する j) 「自分も」と話す子どもに応える k) 「自分が体験した」ということも話す

Aは前日の登園時にアヤから不思議な体験をしたと聞き、帰りの集まりの時にこの話をしようと考えていたと語っていた(表6【Aの話】参照)。アヤの話をもとに、『おもちゃのちゃちゃちゃ』が大すきな子どもたちが自分なりに考えたこと想像したことを話し、聞き合うことができるようにという願いがあったと考える。

【事例3】家族に聞いてきた干支の話(1月13日)

【事例3】は3学期当初の事例である。Aは子どもたちと一緒に書初めをして、保育室に掲示していた。また、お正月のことで子どもたちが興味をもつのは干支だと考え、干支の動物の絵に「ねずみ」「うし」とひらがなで書いたものを12枚保育室に掲示し、子どもたちとどのような動物がいるのかを一緒に確認し、家族の干支も聞いてくるようにと伝えていた(表7【Aの話】参照)。

<この日の園生活>

どんど焼きをするため、登園後に全園児が園庭に集まる。子どもたちは家から持ってきたしめ縄飾りや、Aと書いた書初めも火にくべる。元気で過ごせますようにと煙もあびる。その後、竹馬や氷鬼、郵便やさんごっこ、かるた、すごろく等、それぞれすきな遊びをして過ごす。

<帰りの集まり>

Aが「しろやぎ」「しろやぎ」のペープサートでやりとりを演じて見せながら、『やぎさんゆうびん』を歌う。Aが何度も歌ううちに、子どもたちも歌の面白さがわかってきたようで、笑顔で一緒に歌い始める。Aは絵本『ふゆのゆうびんやさん』(作・絵:すまいるママ)も読む。保護者がたくさん作って園に持ってきてくれた竹とんぼも、手にとって飛ばしてみる。

降園時刻が近づき、Aが「今日のどんど焼き、どうでしたか?煙あびましたか?」と問いかけて子どもたちの話を聞いていると、ナオが話し始める。Aはナオが家族から聞いた干支の話をしようと考えていたのだと理解し、その思いに応じて話を聞き始める(表7【Aの話】参照)。その後、リエの話も聞く場面までを表7にまとめた。

Aは他児も理解しやすいように、掲示している干支の動物の絵を指さしながらナオの言葉を繰り返し、話を聞いていった(c)。ナオの話が終わると多くの手が挙がったが、降園時刻となったため、Aはリエで終わりにすると伝え(a)、話を聞いた後に「またお話ししてくださいね」と話していた。

表7 【事例3】1月13日 家族に聞いてきた干支の話

子ども	A	援助
① ・ナオ「先生」と呼ぶ。 ・ナオ「ほかの人のさあ、えっと、なんかさ、たつとかね」「ねずみのさ、えっと聞く、お母さんとか」と言う。 ・ナオ「えっと、お父さんはさるで」 ・ナオ「そして、お母さんはえっと」 ・ナオ「お母さんはうし」 ・ナオ「お姉ちゃんはね」 ・ナオ「お姉ちゃんはねえ、ひつじ」	・今日したどんど焼きの話をする。 ・「はい」 ・「あ、そうやったね」と応え、「 <u>ナオちゃんのお母さん、何やった?ai</u> 」と尋ねる。 ・「 <u>お父さんはさるで。</u> うん」と応える。 ・「 <u>お父さんはさるで、お母さんはc。</u> 」と言って、壁に掲示した干支の動物の絵の所へ行き、さるの絵を指す。 ・「 <u>うしだったc。</u> 」と、うしの絵を指す。 ・「 <u>お姉ちゃんもおった。お姉ちゃんはc。</u> 」 ・「 <u>ひつじどしだったc。***よねf</u> 」と、ひつじの絵を指す。	ai c c c c cf
・「ハイ!」と多くの手が挙がる。 ② ・リエ「えっとねえ」「ママね、うさぎどし」 ・リエ「パパは…」	・「今日は、じゃあ、ごめんね。 <u>リエちゃんですわりにするね</u> 」と話し、「 <u>リエちゃんa</u> 」と呼ぶ。 ・「 <u>ママはうさぎどしやったc。</u> うん。 <u>パパは?j</u> 」うさぎの絵を指す。 ・「 <u>わからん?わからん?j</u> 」(中略)「じゃあ、またお話ししてくださいね。今日は帰ります」と伝える。	a ci i
【Aの話】お正月とって子どもが一番興味をもつのは干支だと思い、子どもたちと一緒に「ね、うし、とら、う」と言いながらどのような動物がいるか話をしてきた。そして、「おうちの人は何でしょうか聞いて来てね」とも伝えていた。ナオは家族に何ごしか聞いてきて、今日言おうと考えていたのだろう。それで、話を聞かなくてはと思った。		

注) Aの援助: a) 始めのタイミングを伝える c) 子どもの言葉を繰り返す f) 「～ね」「～よね」と応える i) 質問する

【事例4】お正月に凧揚げをした話（1月20日）

【事例4】も1月の事例であり、お正月に体験した子どもがいると考えられる凧揚げの体験について、Aが尋ねた事例である。

<この日の園生活>

製作をしたり、すごろくやかるたをしたり、自分で着色した手回しコマを回してみたり、縄跳びをしたり、ウルトラマンになってAと一緒に「ウルトラマンショー」をしたりと、すきな遊びをして過ごす。

<帰りの集まり>

Aは翌週の土曜日に保護者と一緒にもちつきをすることを説明する。二人一組になって『もちつきべったんこ』を歌いながらふれあい遊びもする。

Aは子どもたちに翌週から保育参加が始まること、1回に3名くらい保護者が来ることも伝え、「みんなが遊んでいるのを見ながら、お手伝いをしてもらったりしようと思います」と話す。そして、凧作りのために用意したビニールを見せ、「凧揚げができるように準備しておきますから、これを作って揚げましょう」と話し、実際に子どもたちの前でやって見せながら、作り方の説明もする。

その後、Aが月刊絵本の中の凧揚げの写真がある場面を開いて話をし、お正月に凧揚げをした子どもたちの話も聞いた場面を表8にまとめた。

ここでのAは、凧揚げをした子どもの話を聞き、その言葉を繰り返すと（c）すぐに絵本を読み始めた。Aは

子どもたちに「お正月に凧揚げした人いたっけ？」（表8下線部 i）と尋ねており、以前にもお正月の体験を話す機会を設けていたことが窺えた。また、この時は凧の絵本を一緒に読みながら、保育参加で取り組む凧作りや凧揚げについての見通しをもてるようにという願いがあったこと（表8【Aの話】）、玄関ホールに飾っている凧をみんなで一緒に見に行こうと考えていたことから、時間をかけて話を聞くことはしなかったと考える。

4. 総合考察

本研究は、幼稚園のクラスの集まりの中でも帰りの集まりの場面を取り上げ、家庭での体験を話す4歳児に保育者はどのような援助するのか、そこにはどのような保育者としての願いがあるのか、「今日楽しかったこと」を話す場面とはどのような共通点や相違点があるのかを明らかにした。

帰りの集まりでどのような内容を主軸にするかは、保育者の考え方と翌日に向けての目的によって違くと指摘されているが（横山，2010）、本研究で取り上げた事例においても、保育者の援助はその時の状況や保育者としての願いによって違いがあった。

【事例1】【事例2】はいずれも登園時に子どもから聞いた話をAが取り上げたことがきっかけとなっていた。子どもの一日の生活の中で、登園時は家庭生活から園生活に移行する時であり、朝の支度をしながら家庭で体験したことを保育者に話すことも多く、一人一人の家庭で

表8 【事例3】1月20日 お正月に凧揚げをした話

子ども	A	援助
<ul style="list-style-type: none"> ・コウが「ハイ」と手を挙げる。 ・コウ：頷く。 ・他の子どもたちも口々に話す。 ・リエ「リエちゃん***とした」 ・マミ「私おじいちゃんどね、いとこと一緒にした」 ・リエ「えっとね、リエちゃんね、おばあちゃんちでねえ、おばあちゃんのね、友だちとねえ、一緒にした」 ・「連凧」 	<ul style="list-style-type: none"> ・「凧凧あがれ」と絵本を読み、凧の写真を見せ、保育室に飾っている凧と同じだねと話し、玄関の所にすごく大きな凧があるから、帰る準備をしたら見に行こうと話す。 ・「<u>お正月に凧揚げした人いたっけ？</u>」と子どもたちに尋ねる。 ・「<u>お父さんとした？</u>」とコウに尋ねる。 	<p>i</p> <p>i</p>
<p>【Aの話】 保育参加についての見通しをもてるようにと考えていた。1・2学期にも体験し、今回が3回目になる。2学期の保育参加では、一緒に氷鬼をしたりした。1学期のように「遊ぶ遊ぶ」と甘えたりはしなくなるが、「お母さんが言うことを聞いてくれる」と思い、自分の遊びの中に引き込んで日常と違う生活をする姿もあった。3回目になると、そのようになってほしくない。保護者と「これをしよう」という物があるとよいのではないかと思い、この時期にする凧作りを一緒にしようと考えた。</p>		

注) Aの援助：c)子どもの言葉を繰り返す i)質問する

の体験を知るためにも貴重な時間であることがわかる。

家庭での体験は「今日楽しかったこと」のように把握できていないことも多いため、Aは子どもに質問しながら話を聞くことから始めていた。Aがそのように話をよく聞くことは、「今日楽しかったこと」を話す時と同様に、他児の中に「自分も」「お話ししたい」という思いが生まれるための援助にもなっていた。また、Aは話を聞いている他児の様子から「お話ししたい」という思いがあると理解すると、さらに問いかけたり、時間をとって話を聞こうと判断したりしていた。

【事例1】【事例2】は12月のクリスマスが近づいた時期であったこともあり、自分の中で思い続けたことや、考えたこと想像したことを話す子どももいた。特に【事例1】で話したサンタさんをお願いするプレゼントは、この時期の子どもにとって大変な「関心事」である(表4【Aの話】参照)。富田(2014)は大学生による幼児期についての回想報告を分析し、サンタクロースの存在を信じていた理由として「プレゼントをもらった体験」と「サンタクロースへの手紙やその後のやりとり」が多く挙げられたと報告している。また、次に効力を発揮すると考えられるのは「他者の証言」であるとも述べている。【事例1】でも、Aはサンタさんをお願いしたプレゼントやサンタさんに書いた手紙について聞いた話を取り上げるだけでなく、「自分の体験」として「先生」はきちんとサンタさんをお願いしなかったから、ほしかった物とは違うプレゼントをもらったと「証言」する話もしていた。このような話をするこども、子どもたちに「お話ししたい」という思いが生まれるための援助になっていた。

【事例2】では、Aは子どもたちがこの時期歌うことを楽しんでいた『おもちゃのちゃちゃちゃ』の世界のような不思議な体験をしたという子どもの話を取り上げていた。そして、兄が「本物」のサンタを見たいと話した子どもがいたら、ここでも「先生の子ども」も「本物」のサンタを見たいと「証言」する話をして、子どもたちの「お話ししたい」という思いがさらに大きくなるようにしていた。

ここで夢なのか想像なのか判断がつかねる話も含めて様々な話をする子どもがいたことは、4歳児の頃から空想と現実が曖昧な状態から次第に区別され始めること(富田, 2017a)の表れと考えられる。幼児期には想像的なものに対する恐怖が増加する傾向もあり、その対象や状況の不明瞭さのために怖がられることが多いが、そのことは子どもにとって想像や推論の余地が大きいということでもあり、保育者の実践の方法や展開などに様々な可能性があるとも指摘されている(富田, 2017b)。Aがここで不思議な体験をした子どもの話を取り上げた

のは、このような体験について話したり聞いたりすることで、さらに自分なりに考えたり想像したりしてほしいという願いもあったためだと考えられた。

Aは【事例1】【事例2】でサンタクロースや不思議な体験について話す子どもに答える際に、「回答を期待しない、聞き手に配慮がある疑いという意味機能」がある終助詞「かね」をつけた話し方もしていたが、このような応え方も、子どもの思いに共感しながら、自分なりに考えたり想像したりしてほしいという願いの表れと考えられた。

次に取り上げた【事例3】【事例4】は1月の事例であり、子どもが家庭で聞いてきた家族の干支の話や、お正月に体験した凧揚げの話をしてきた。

Aはお正月に関するこどもが興味をもつのは干支だと考え、3学期当初に干支にはどのような動物がいるかという話をしていた。家族に何としか聞いてきてねとも伝えており、幼稚園で聞いたことを家庭で話し、家庭で聞いたことを幼稚園で話すという経験ができるようにもしていた。そして、【事例3】では、降園時刻が近づいた状況の中でも、Aから言われたことを覚えていて家庭で聞いてきたことを話そうと思っていた子どもがいたら、その思いに応じて話を聞く時間をつくっていた。

【事例4】では、Aは子どもたちにこれから実施する保育参加で保護者と一緒に体験する凧作りや凧揚げについての見通しをもってほしいという願いをもってため、凧の作り方を説明したり、凧の絵本を読んだりする中で、お正月に凧揚げをした人はいるかも尋ね、子どもの話を聞くようにもしていた。

Aは子どもたちが話したことについて保護者と伝え合うこともしており(表4【Aの話】参照)、帰りの集まりで家庭での体験を話すことは、子どもや保育者だけでなく、保護者にとっても家庭と園の生活をつなぐ機会になっていた。また、「今日楽しかったこと」を話す時と共通する援助とともに、家庭で体験したことを話す時だけに観察された援助もあったことから、子どもが「お話ししたいこと」の内容に応じて援助を考えることが大切であることも確認できた。

子どもたちの中には、Aに問いかけられたり他児の話も聞く中で、自分からは話さなかったことを思わず話してしまう姿も見られ、このような場では子どもの中にある思いや願い、考えが引き出されることもあった。「保育の中で他者の経験に関する語りを聞き、自らも経験を語ることを繰り返すこと」は、「互いを固有の『過去』、経験や感情を持つ存在として明確に感じる場」にもなる(小松, 2007)と指摘されているが、自分が家庭で体験したことを話したり、友達の家庭での体験について話を聞くことは、話題の選び方によっては子どもが他者に

ついて知ったり、自分の中にある思いや願い、考えを明確にする貴重な機会となると考える。

本研究はクラスの集まりの中でも、一日の園生活の終わりに設けられた帰りの集まりの場面を取り上げたが、これまで筆者が帰りの集まりを参与観察したクラスの中には、3学期当初の帰りの集まりで冬休みの体験を話す場を設けていたこともあった(中島・大森, 2016)。しかし、本研究ではこのような話題について話す場面を観察することはできなかった。また、対象クラスの園生活の中で日常的にクラスで集まるのは降園前であったが、登園後に朝の集まりをする園もあり、その中で休日にもどのように過ごしたかを話す園もある(保木井, 2020)。今後はそのような園での参与観察や保育者へのインタビューも実施し、クラスの集まりの中で子どもが話す場面での保育者の援助についてさらに考察していきたい。

引用文献

- 伊豆原英子 (2003) 終助詞「よ」「よね」「ね」再考。愛知学院大学教養部紀要, 51(2), 1-15.
- 岩田純一 (1998) <わたし>の世界の成り立ち。金子書房, 171.
- 太田友子 (2018) 幼児期における「振り返り」活動— 幼小接続期におけるメタ認知に関する一考察—。大阪総合保育大学紀要, 12, 179-196.
- 小松孝至 (2007) 「子どもの自己」をめぐる発達研究と教育— 幼児期の「自己理解」「自己の構成」と幼稚園教育との関連から。大阪教育大学紀要第IV部門, 55(2), 55-6.
- 譚崢 (2014) 複合終助詞の結合方式について— 「かな」「かね」などを例に—。福井工業大学研究紀要, 44, 451-459.
- 富田昌平 (2014) 子どもはなぜサンタクロースを信じ、やがて信じなくなるのか?— 大学生による回想報告をもとに—。三重大学教育学部研究紀要, 65, 教育科学, 149-158.
- 富田昌平 (2017 a) 幼児期における空想世界に対する

認識の発達。風間書房, 89.

- 富田昌平 (2017 b) 幼児期における恐怖対象の発達的变化。三重大学教育学部研究紀要, 65, 教育科学, 129-136.
- 中島寿子 (2019) 帰りの集まりで子どもが「お話したいこと」を保育者はどのように支えているか—ある4歳児クラスの事例をもとに—。日本保育学会第72回発表論文集, 1063-1064.
- 中島寿子 (2020) 帰りの集まりにおける子どもの振り返りと保育者の援助— 幼稚園4歳児クラスにおける参与観察をもとに—。保育文化研究, 11, 1-15.
- 中島寿子・大森洋子 (2016) 保育者は「帰りの集まり」をどのように構想するのか。山口大学教育学部教育実践総合センター研究紀要, 42, 89-98.
- 奈良女子大学附属幼稚園 (2007) 集団における言語表現形成及び協同性にかかわる調査— 「みんなへのおしらせ」を素材として—。奈良女子大学附属幼稚園研究紀要, 28, 34-43.
- 保木井啓史 (2020) 幼稚園の集まり場面における子どもと保育者の相互行為の研究— アプロプリエーションの観点から—。子ども社会研究, 26, 25-46.
- 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領, フレーベル館, 112-113.
- 横山文樹 (2010) 幼児にとって「集まる」ことの意味— 幼稚園の「お帰り」からの考察—。学苑・初等教育学科紀要, 836, 33-44.

付記

本研究は以下のポスター発表について大幅な加筆修正をしたものです。

ご協力いただきました幼稚園の先生方、子どもたちと保護者の皆様に心よりお礼申し上げます。

中島寿子 (2020) クラスの集まりで子どもが「お話したいこと」を保育者はどのように支えているか— 4歳児が家庭での体験を話す場面を中心に—。日本保育学会第73回発表論文集, 813-814.